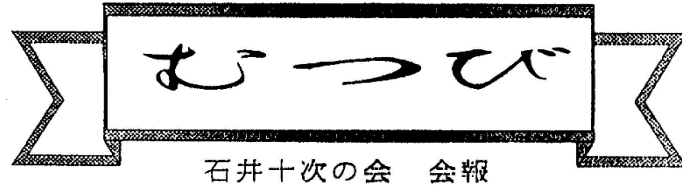


2026 年
(令和 8 年)
4 月 9 日



343 号

縁のかさなり

石井十次の会 西都支部 福島博子

昨年の石井十次の足跡を辿る岡山研修旅行で最初に訪れたのは、岡山市指定史跡「岡山孤児院発祥の地」でした。昭和の原風景が残る里山に静かに佇む小さな建物に足を踏み入れると、十次のことばが掲げられていました。

「信じて疑うことなかれ 祈りて倦むことなかれ

為せよ、屈するなかれ 時重なればその事必ず成らん」

静かな空間でその言葉を見つめていると、時を越えて語りかけられているような気がしました。

福祉という概念すら十分ではなかった時代、十次はここを出発点に東奔西走しながら、「信じ」「祈り」「為し続けた」のだと思うと、その覚悟の深さに胸を打たれます。

上阿知を後にして向かったのは、近代実業家 大原孫三郎 の多大な貢献によって今日に伝えられている倉敷美観地区。若き日、放蕩の末に謹慎を命じられた孫三郎が十次の活動に触れ、その志に心を激しく動かされ、人生を立て直して社会事業へと歩みを進めたことはよく知られています。一人の志が、別の一人の人生を方向づけたのです。

その後、孫三郎は福祉や教育、文化の振興に尽力し、十次の事業を力強く支えました。そしてその奨学制度によって学びの機会を得

たのが画家 児島虎次郎 です。虎次郎は後に十次の娘・友と結ばれ、そのご縁はさらに次の世代へと受け継がれていきました。話には聞いていたことでも、実際にその地に立つと、ひととき深く胸に沁みてきました。一人の志が一人の心を動かし、さらに新たな志を育てていく。そのかさなりの先に、今の私たちがあるのだと感じました。

加計美術館で開催されていた「増田^{しょうとく}常徳～縁のかさなり展～」では、三枚の十次の肖像画を拝見しました。同じ人物でありながら、描き手によって異なるまなざし。しかしどの画にも、優しさと厳しさ、そして揺るぎない信念が宿っているように感じられました。とりわけ虎次郎の描いた肖像画を前にしたとき、胸に込み上げるものがありました。孫三郎の奨学制度がなければ、虎次郎の画業はなかったかもしれません。その虎次郎が十次を描き、さらに、そのご縁が今日へとつながっている。その事実、言葉に尽くせぬ深い縁を思いました。

理事長が折に触れて語られるように、福祉は「和・輪・環」をつなぐ営みです。十次の時代、福祉は地域の支えの中で育まれてきました。その精神は、制度が整った現代においても変わるものではありません。私たちの働きもまた、多くの方々の支えによって成り立っています。

今回の旅は、十次の歩みとその影響を受けた人々や歴史を学ぶ研修であると同時に、自らの立ち位置を見つめ直す大切な時間でもありました。この尊い縁のかさなりの中に生かされていることを、あらためてありがたく思いました。

いただいた学びと感謝を胸に、私もまた、この志の一端を担う者として、歩みをかさねてまいりたいと思います。

祝！！宮城博範先生 二紀会会員推挙



『新世界 25-01』

石井記念有隣園の宮城博範園長は25年前から「二紀展」に出品を続け、2009年に準会員に推挙され2023年には準会員賞を受賞しています。この度「第78回二紀展」の絵画の部で会員に推挙されました。会員に推挙されることは並大抵のことではありません。25年を超える長年の努力の賜物です。

今回の出品作『新世界 25-01』（アクリル 130号）では化石や骨、工場の煙突などを配置して混沌とした世界とそれを見つめる目を描いています。

宮城先生の大好きな絵は、「^{あいま}燦光」（戦争協力画を拒否した戦没画家）の作品「眼のある風景」です。「心に強く訴えかけるものがあります。私もいつかこのような強い絵を描けるようになりたいです。」と話されていました。宮城先生は「会員になることは大きな目標でしたので、夢が一つ叶いました。おごることなく、これからも更に精進したい。」と話されていました。

宮城先生はこれまでに県内外で色々な受賞歴があります。私は宮城先生がこれまで長年にわたり描いてこられた「方舟館」と「子どもたち」をモチーフにした「方舟」の作品が心に深く残っています。

「方舟」の絵画は、高鍋町美術館の常設展「アートは生きる力～長寿の秘訣」（会期2024. 4.2～9.23）で展示されました。

*二紀会は、日本の美術団体。公募展二紀展を主催している。二紀会は旧二科会の活動を第一期として、戦後新しく第二の紀元を画する意図のもとに、1947年に旧二科会員であった熊谷守一等によって創立された。

参考資料：2025年11月7日宮崎日日新聞
宮城博範先生からのお便り（絵はがき）

（編集委員 徳地順子）

懐かしい昭和 30 年代の小学校での暮らし（その 2）

遠足といえば、春は山菜、秋はアケビ取り、シイの実やクリ拾いがお決まりでした。最も楽しみだったものの一つが週に 1～2 度、先生のお子どもさんが分けてくれるザラメの付いた 2 円玉（飴玉）。手のひらに載せると、ザラメがきらきら光りとても高級そうなものでした。この飴玉は、一度家に持ち帰り神棚にあげてから夕食までの間ずうっと舐めていたものです。二つ目の楽しみは一学期の終業式後のイベント、五色のそうめん流し。川まで降りていき、先生の奥様が用意してくださった鍋一杯のそうめんは一瞬のうちになくなります。その様子を先生は笑いながら見ていた気がします。

当時、当然ですが地区のどの家にも電話などありません。緊急時、どのようにして保護者と連絡を取っていたと思いますか。子どもたちが学校で体調を崩した時、怪我をしたとき、学校と谷を隔てた向かえ側にあった私たちの家には、先生が拡声器を使って連絡をしてくれたのです。「お父さん、聞こえたら手拭いを振ってください。・・・」親たちは仕事の手を止め、手信号ならぬ腰に下げた手拭いを大きく振って応えていたのです。そして、お互い谷まで降りていき子どもを渡していたようです。こんなこともありました。その日は本校に登校する日だったことをすっかり忘れていた双子の私たち。父や学校に連絡するすべもなく、本校に行くか、家に帰るか、葛藤した後、とった行動は「山学校」でした。一日をどう過ごしたのか、ほとんど覚えていません。時間の流れの見当もつかず、腹時計に頼るしかありませんでした。長い一日だったことは覚えています。幼心に、本校に行けなかったことを両親には気付かれていないはずでした。帰ると、父が「学校はおもしろかったかい。」と、笑って迎えてくれました。普段は言わない父のことばでした。私たちが本校に登校しなかったことをどうやって知ったのか、ふしぎでした。

分校時代の生活を振り返ると、不便なことや大変な思いもしたはずですが、先生や友達、地域の方々と思い切り楽しんだ日々だけが思い出されます。

まさに、これらの学校生活こそが私を教師の道に導いてくれたのです。

（むつび編集委員 黒木三鶴）

《 お し ら せ 》

- ★新会員のご紹介（敬称略） 【神奈川県】安野 朋花
- ★ご寄付をいただきました（敬称略） 【木城町】森 さち子 【美郷町】河内 伯雄
- ✿石井十次の会これからの行事について（ご案内）
 - 4 月 11 日（土）9：00～鯉のぼり掲揚  場所：友愛社前水田
 - 4 月 25 日（土）令和 8 年度石井十次の会総会 10：00～ 会場：友愛社研修館
- ★5 月通信発送作業は 5 月 13 日(水) 14 日(木) 両日ともに 9：00 からです。

*ここまでの掲載者は編集等の都合により 3 月 25 日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・

団体に毎月送付しています。

〒 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

編集後記

- 巻頭言は、石井十次の会西都支部の福島博子様に玉稿をいただきました。岡山研修旅行が十次の歩みとその影響を受けたことや歴史を学ぶ機会になったと伺い、一度訪ねて見たくなりました。